

平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)

成果報告書

団 体 名	特定非営利活動法人あしづえ	
施 設 名	松江市八雲林間劇場 (しいの実シアター)	
助成対象活動名	公演事業・人材養成事業・普及啓発事業	
内定額 (総額)	5,856	(千円)
公 演 事 業	3,303	(千円)
人 材 養 成 事 業	1,809	(千円)
普 及 啓 発 事 業	744	(千円)

(2) 平成30年度実施事業一覧

【公演事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	幼稚園・保育園連携公演 「かえるくん・かえるく ん」	2018年6月14日・15日	演目：かえるくん・かえるくん 出演：人形劇団ひぼぼたあむ	目標値	150
		しいの実シアター		実績値	237
2	文化施設・学校連携によ る「ゼロ弾きのゴー シュ」公演	2018年8月5日 ～10月29日	演目：ゼロ弾きのゴーシュ 出演：劇団あしづえ 演出：園山土筆	目標値	1,060
		しいの実シアター、銀河 ホール		実績値	1,420
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	1,210
				実績値	1,657

(2) 平成30年度実施事業一覧

【人材養成事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	アートマネジメント講座 (国際演劇祭)	2018年7月25日 ～9月9日	内容：①「森の演劇祭」を題材にした講座 ②沖縄「りっかりっかフェスタ2018」でのOJT形式での講座	目標値	24
		しいの実シアター他		実績値	52
2	コミュニケーションワーク ショップリーダー養成 講座	2019年2月2日～3日	講師：高尾隆 回数：2回	目標値	20
		しいの実シアター		実績値	22
3	演劇公演創造講座	2018年5月26日 ～12月2日	内容：①音響講座 ②照明講座 ③公演講座 講師：奥隆史、岡本敦他3名	目標値	200
		しいの実シアター		実績値	307
4	「高校演劇部」 支援事業	2019年3月11日～17日	講師：園山土筆、有田美由樹、 岡本敦、川村真美、長見好高、 黒田徹	目標値	240
		しいの実シアター		実績値	86
5	人材交流	2018年8月17日～ 2019年1月13日	派遣先：いわみ芸術劇場 派遣職員： 有田美由樹、前村晴奈	目標値	1
		いわみ芸術劇場 グラントワ		実績値	10
6	大学との連携	2018年4月12日 ～7月2日	派遣職員：園山土筆、 有田美由樹、前村晴奈	目標値	8
		島根県立大学		実績値	425
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	493
				実績値	902

(2) 平成30年度実施事業一覧

【普及啓発事業】					
番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	学校公演と ベイベーシアター	2018年6月14日	演題：子どもが演劇にふれることの大切さ＝学校公演とベイベーシアター＝「ベイベーシアター」ってどんなもの？	目標値	20
		しいの実シアター		実績値	41
2	しいの実シアター 未来学校 (第1期3年度)	2018年8月6日～8日	講師：永野むつみ、大澤直、園山土筆、有田美由樹、中村千恵子、前村晴奈	目標値	36
		しいの実シアター、かやぶき交流館		実績値	55
3	コミュニケーションワーク クシヨップ	2018年5月19日 ～11月11日	講師：園山土筆、有田美由樹、田中小百合	目標値	60
		島根県立松江緑ヶ丘養護学校体育館他		実績値	210
4	しいの実シアター森のカ レッジ第3回	2019年2月24日	演題：シェイクスピアってこんな人だった！ ヴェニスの人ってどんな劇？ 講師：門野泉	目標値	20
		しいの実シアター		実績値	24
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	136
				実績値	330

【妥当性】

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

ミッションである「共に考え行動する劇場」として、地域の課題解決に向けた事業を行うことができた。学校、保育園、企業、児童施設、介護施設と連携し、アートの力を取り入れ、コミュニケーション力不足や子育ての悩み、若者の社会性の低下といった暮らしの課題の解決を図った。

2つの公演事業は、保育園7園、児童施設、介護施設、公民館、中学校との連携で行った。継続して鑑賞している子どもたちは、物語の登場人物の気持ちの機微を感じる様になったと保育従事者から言われた。

人材養成事業の1事業は高等学校8校と連携で行い、1事業は島根県立大学と連携で行った。島根県立大学では受講生（大学生）による授業評価が行われており、本事業の結果は全授業の中で最も評価が高かった。それだけ受講生の心に響き、自己啓発になったのだろうと副学長から言われた。

普及啓発事業の内1事業は、児童施設、保育園、企業と連携で行った。乳児から高齢者までのワークショップでは、子どもが周りに迷惑を掛けるのではないかと日常で肩身の狭い思いをしている若い母親が、子どもを中心に交流を図ることができ、心が開放され、子育ての悩みが軽減された。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

ステークホルダーの保育園からは、当地での未就学児の劇場観劇の機会の継続を強く要望されている。保育園連携公演の取り組みは平成13年から継続して17年間にわたっており、当地の保育従事者は、幼児の発達に文化芸術の果たす役割が高いことを実感している。当劇場以外は保育園連携公演を実施していないため、継続のニーズは高い。

また、暮らしの課題である、「コミュニケーション力不足」「子育ての悩み」「若者の社会性の低下」について、所属劇団員が行うコミュニケーションワークショップによって解決を図ろうとしている。

この様に、事業目標は、実施を重視するのではなく、実施後に地域の課題が解決することを目標にしている。

【有効性】

自己評価

目標を達成したか。

【公演事業】

事業1は、観劇後、観客の生活に変化が生じること、事業2は、新規の観客が増えることを目標設定し、達成した。乳幼児から観劇できる公演事業1は、保育者や保護者にアンケートやヒアリングをし、「観劇した子ども達が物語の登場人物の気持ちの機微を感じるようになった」と回答を得た。公演事業2は、アンケートをとったところ76.1%の回収率で、新規の観客が半分以上の51%であった。

【人材養成事業】

事業2の目標は芸術文化を社会に役立てることを理解してもらうことで、実施後ヒアリング結果では「自分の再発見になる。交流のツールになる」との回答が8割以上で達成した。事業3は、演劇を始めたばかりの若者たちが自主公演を行えることを目標とした。実施後ヒアリングでは、「この事業には次回も参加したいが、自分達で自主公演を行うのはまだ難しいということが分かった」という結果で、目標は達成しなかったが、演劇公演運営の知識・経験は深まった。事業6は、芸術文化を活用し、コミュニケーション力を向上させることを目標とし達成した。実施後レポートで、「コミュニケーション力は向上した」とほぼ全員が回答した。

【普及啓発事業】

事業1は、子ども達の成長に文化芸術が果たす役割を理解してもらうことを目標とした。回収率95%のアンケートにおいて、理解できた人が100%で目標を達成できた。事業2は、文化芸術体験でコミュニケーション力などを向上させることを目標にし、達成できた。実施後ヒアリングでは、「弟（妹）に優しくなった」「服のボタンを自分で直したいと言ってきた」など成長の様子が報告された。事業4は、演劇鑑賞の楽しみ方を知ること目標とし、達成した。実施1ヶ月後に参加者24名に電話ヒアリングを実施したところ、全員が「シェイクスピア作品を観劇したい」と回答した。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

【公演事業】

事業費は、予算7,479千円に対して決算7,859千円で、105%増である。

参加者数は、目標1,210人に対して1,657人で、136%増である。

収入は、予算2,335千円に対して決算2,608千円で、収益率は予算31%に対して決算33%で収益率が上がった。

事業期間は当初の計画通りで、適切な事業費の中で参加者数が増えた。

「1. 幼稚園・保育園連携公演」では、前年度の2月には案内を行い、当該年度の園行事に入れてもらえるように働きかけ、功を奏した。

【人材養成事業】

事業費は、予算3,303千円に対して決算3,489千円で、105%増である。

参加者数は、目標484人に対して902人で、186%増で、全ての事業で目標人数よりも多くなった。

参加者数が大幅に増えた理由は、「6. 大学との連携」において、年度中に「報告書」の書式が変更になり、「申請書」では派遣職員数を記載し、「報告書」では派遣先の受講人数を記載する形になったためである。

収入は、予算78千円に対して決算175千円で、収益率は予算2%に対して決算5%で収益率が上がった。

事業期間は当初の計画通りで、適切な事業費の中で、参加者数が増えた。

【普及啓発事業】

事業費は、予算1,858千円に対して決算1,945千円で、105%増である。

参加者数は、目標136人に対して330人で、253%増で、全ての事業で目標人数を上回っている。

参加者数が大幅に増えた理由は、「3. コミュニケーションワークショップ」において、実施回数は同じだが、受講者が大幅に増えたからである。この事業の共催者の広報力が強く、予算を掛けなくても口コミで受講生が増えた。

収入は、予算212千円に対して決算157千円で、収益率は予算11%に対して8%で収益率が下がった。収益率が下がった理由は、共催者負担金が予算の50%になったためである。共催者とは話し合いを重ねながら実施し、負担金の減額についても両者協議の上、了承済である。

事業期間は当初の計画通りで、適切な事業費の中で、参加者数が増えた。

【創造性】

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

芸術監督の園山土筆は、1966年に専属劇団あしぶえを立ち上げ、53年間代表・演出として活動している。また、1995年に完成した「しいの実シアター」には設計・建設から係わり、以降24年間、芸術監督として劇場運営を行っている。地域における劇場の在り方を全国発信し、島根県文化功労者表彰、山陰中央新報社「地域開発賞・文化賞」、ソロプチミスト日本財団「社会貢献賞」を受賞している。2018年度には、文化庁主催「カルチャーニッポン シンポジウム」にパネリストとして参加した。

専属劇団あしぶえは、国際交流基金「地域交流振興賞」（現・地球市民賞）、サントリー文化財団「サントリー地域文化賞」、山陰信販株式会社「山陰信販地域文化賞」、中国新聞社「中国文化賞」、文部省「地域文化功労者文部大臣表彰」、島根県「島根県文化奨励賞」を受賞し、文化芸術の力で地域振興をけん引している劇団である。

公演事業2. 文化施設・学校連携による公演では、代表作の「ゼロ弾きのゴーシュ」を上演した。この作品は、初演から28年、上演回数186回、4万人が観劇し、3つの海外演劇祭で合計6個の国際賞を受賞している。2018年度は、新聞記事に3回取り上げられた。山陰中央新報2回、読売新聞1回。内1回は、早稲田大学非常勤講師の片山幹生氏による劇評が掲載された。劇評では以下の3点において「珠玉の作品」だと評価された。①舞台上で提示する情報が厳選され、表現は磨き上げられていた。②俳優の動きや表情、視線の演技など細部までコントロールされている。③オーケストラの演奏がもたらす解放感を演者の合唱で表現する素晴らしい演出。更に、片山氏からは、原作者の宮沢賢治の世界から解き放たれ、あしぶえ独自の「ゼロ弾きのゴーシュ」が完成されたと口頭で伝えられた。

普及啓発事業2. しいの実シアター未来学校は、車通りの少ない山間部に立地している劇場の良さを生かし、小学生から中学生までを集め、3日間連続の講座を行っている。元々は、不登校の子どもが外部に興味をもてるような事業を探していた保護者の声で始まった。木や田んぼなど自然の中で人形劇の創作、発表することで、子どもたちは、自分の内面を外部に発信することができるようになった。

【創造性】

自己評価

地域の実演芸術の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

当劇場で22年間行われている7校の高等学校による合同演劇公演について、高校演劇部の顧問から進め方の相談を受け、課題を解決するために人材養成事業4.「高校演劇部」支援事業を行った。演出・俳優・舞台技術・広報において、劇場の専門人材が講師となり最終的に合同公演を行った。過去に実施した22回の合同公演は、成果を検証することなく上演するだけだったが、2018年度は、1回目の上演の結果を踏まえて2回目を上演するなど、高校生の学びが目に見える形で現れ、高校生自身の満足度も増した。

普及啓発事業3. コミュニケーションワークショップでは、演劇の力を使い、他者との交流を深める活動を行っている。2018年度は、主催事業としては4回であるが、地域からの講師派遣依頼が多く、保育園、小学校、中学校、高校、短期大学、大学、団体、地域、PTAなどで、実施回数86回、のべ2,260名に対してワークショップを行った。当劇場では2000年から表現・コミュニケーションワークショップを本格的に始め、18年間の実績と定評により、毎年継続してワークショップを依頼されている。

政策研究大学院大学 公共政策プログラム 文化政策コースが主催している「劇場の未来を考える」事業に協力劇場として参加し、全国インターネット調査を行った。認知度や来館しない理由、リピーター率などを調査し、課題としてイベント数の少なさと交通機関の不便さが挙げられた。そこで、公益社団法人全国公立文化施設協会が行っている「劇場・音楽堂等への芸術文化活動支援 支援員の派遣」を活用し、日本大学理工学部建築科特任教授（工学博士）の本杉省三氏に解決方法を相談し、2019年度に向けて取り組むことになった。

【持続性】

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

【劇場・音楽堂等間のネットワークの形成】

人材養成事業1. アートマネジメント講座（国際演劇祭）で、「りっかりっかフェスタ」にOJT研修を受け入れてもらい、その後も国際演劇祭の作品選定についてアドバイスを受けている。

【教育機関とのネットワーク】

島根県立大学とは、2011年に「表現・コミュニケーションワークショップ・プログラムの開発で連携し、その後、毎年継続して8年間、表現・コミュニケーション講座を依頼されている。2018年に大学部が開校してからは短期大学部に加え、大学部でも講座を開催することになり、益々拡大している。

劇場から最も近い松江市立八雲小学校では、2001年から「劇づくり」や「コミュニケーションワークショップ」を毎年継続して18年間実施している。

松江市立八束学園では、2012年からコミュニケーションワークショップを毎年継続して7年間実施している。

松江市内の保育園・幼稚園と連携した公演は、2006年から毎年継続して13年間実施している。出演団体や演目選定には絶大な信頼が寄せられており、毎年200～250人の未就学児が劇場で鑑賞している。

【指定管理料、設置者からの事業予算】

2018年度 12,589千円
2017年度 12,589千円
2016年度 12,588千円
2015年度 11,949千円
2014年度 9,969千円

毎年、指定管理料と事業予算は増えている。設置者からは、事業成果を高評価されている。

【財政支援者の推移】

2018年度	寄付額1,964千円	賛助者248	賛助額1,001千円
2017年度	寄付額6,024千円【演劇祭】	賛助者206	賛助額953千円
2016年度	寄付額966千円	賛助者231	賛助額1,024千円
2015年度	寄付額3,090千円	賛助者239	賛助額1,025千円
2014年度	寄付額7,829千円【演劇祭】	賛助者241	賛助額1,029千円

寄付額が毎年大幅に違うのは、3年に1度国際演劇祭を開催しているためである。今後も国際演劇祭実施年に併せて寄付を依頼していく。

賛助者、賛助額共に昨年度より増えている。2017年度まで少しずつ減り続けていたため、理事を中心に賛助者の声掛けを行ったところ、功を奏した。